

異文化との出逢いー日本語学習の現状と問題

上條 雅子

近年、日本の経済発展とあいまって日本語を学ぶ外国人が国内・国外共に世界レベルで増加している。これら外国人の年齢層は小学生から大人までと幅広い。日本語学習の目的は従来のアカデミックな日本研究に加えて、教育機関における第二外国語としての日本語、労働者や難民に不可欠な日常生活語、ビジネス・技術研修、外交交渉などの専門語の習得と多岐に亘る。日本語のレベルも、従って学習の目的によって異なる。

国外では日本語を自国の言語で学習するケースが多く、日本人と日本語を使用する機会も当然少ないために、特別なケースを除いては日本語の上達は遅く、異文化コミュニケーションの問題も少ない。しかし、外国人が日本で初めて日本文化に接し日本人とコミュニケーションすると、生活と日本語学習両面で期待はずれや落胆、思いもかけない誤解や勘違いなど、いわゆる異文化コミュニケーションの問題が生じる。この問題は年齢、学習目的、日本語のレベルのみならず、民族・国民、異文化適応能力・日本文化に関する知識によって複雑に異なる。問題の共通要因として、限られた知識や間違った情報によって形成されたステレオタイプの日本人、日本の社会・生活習慣・価値観に関するイメージと育った社会背景や価値観によって他民族を判断する自民族主義 (ethnocentrism) が挙げられる。

日本語の基礎に加えて政治、経済、社会、文化に関する日本事情を学んだ英国の学生の場合、茶道、書道、盆踊りなどには興味を示すが、特に価値観に関してはイメージと現実とのギャップが大きいようである。特にホームステイにおいては、日本的なバスツアーなどの集団行動は好まず、始

終束縛されず個人の自由行動を好む英国人の個人主義と外国人を客として扱う日本人の特別待遇が、お互いに異なる方法で「和」を保とうとするために摩擦を起し易い。価値観の違いをいずれかの言語で説明したとしても、お互いに相手の言葉が十分に通じない上に説明も不十分で、結局、価値観と言語の両面から不満、誤解という異文化コミュニケーションの問題が生じる。短期間の日本語研修では、彼等は日本文化に接しながら日本語を使用することを望むようであるが、基礎的な日本語のレベルでは日常会話さえも難しく、日本語の上達はあまり望めないようである。

アジアの学生の場合、日本人との経済観念の違いや働きながら学ぶ学生が多いために、日本人と交流する機会も少なく、自民族主義の域を出ないことが多い。受験や就職という現実的な学習目的の場合は、日本語の上達は早いようである。ビジネス、技術研修、外交交渉などの専門分野においては、自国において事前に日本事情や日本語の高度な知識を習得しているケースが多く、準備された受け入れ機関で日本語を使用することが期待され、学習目的も明確であるから、概して日本語は上達する。しかし、価値観において異文化コミュニケーションの問題は避けられない。発展途上国からの技術研修生は、日本語学習が目的ではないのに英語による講義で「こんにちは」と日本語で挨拶する。彼等にとって近代文化日本のイメージと現実とのギャップは大きく、日本の経済発展と日本人が殆ど英語が話せないという両極端の現状に驚きを示す。アジア諸国や南アメリカからの労働者や難民の場合、日本語の基礎はもとより日本事情に関する知識や日本語習得に費やす時間も

皆無に等しい上に、教育背景、経済、生活習慣のレベル、学ぶ意志も低い、日常生活に関する日本語習得と異文化コミュニケーションの問題は外国人の中で一番大きい。

異文化コミュニケーションの問題を少なくするためには、ステレオタイプのイメージから脱却

すると同時に自民族主義に固執せず、異文化コミュニケーションを密にし、異なる点は認めながら文化的相対性(cultural relativism)を見出す努力をすることである。この状況下で、外国人学習者にできるだけ多く日本語を話す機会を準備する事が、日本語学習にとって効果的であろう。

誤用

浅山 佳郎

外国語を学習する者にとって、誤用は、その外国語の難しさを思い知らされるものだが、言語を扱う者にとっては、たいへん興味深い現象となる。以下は、日本語教育での誤用についての、僕自身の最近の失敗した試みの報告である。

当面の僕自身の関心にしたがえば、誤用の原因は大きく2つに分けることができる。1つは学習者の母語の反映で、もう1つは学習者の形成する言語能力の限界である。

たとえば、前者の例として、次のような誤用をあげてみる。

- (1) 警察に入って柔道のもっと厳しい稽古を練った。

これは中国語を母語とする日本語学習者の作文からとった。原因は、中国語で「稽古を積む」ことを「練工夫」と表現することにある。日本語と中国語が同じ漢字を用いるので、「練(lian)」という中国語動詞がそのまま「練る」という日本語動詞にうつり、「工夫(稽古)を練る」という誤用が生ずる。

いっぽう、外国語学習者は、頭脳の中にそれぞれの段階における対象外国語の体系を形成している。しかし、この体系は完全ではないので、誤って適用してしまい誤用を起こすことがある。これが2つめの原因なのだが、これには母語は関わらない。たとえば、次のような例をあげることができる。

- (2) 先生の病気が治されたらいいなと思っていました。

この誤用をおかした学習者は、日本語の可能表現を、「動詞に助動詞(ラ)レルを付ける」と学習している。そこで、「仕事を続けるー仕事が続けられる」などと同じ操作によって、「病気を治すー病気が治される」と作る。しかし、現代日本語では、いわゆる5段動詞の可能は可能動詞形と呼ばれるかたち、つまり「治す」であれば「治せる」のかたちが優先する。学習した構文を、使うべきではないところに過剰に適用してしまうのが、この誤用である。

さて、試みてみたかったのは、誤用の傾向を特定することだ。もっと言えば、単純な母語の反映より、不完全な言語体系の過剰な適用の方が多いのではないかという予想を立てたのだ。

取り上げた誤用は、以下のようなものである。「木を枯らす」という他動詞の文と、「木を枯れさせる」という自動詞使役の文の2つは、同じような意味の文として存在する。しかし「窓を開ける」に対しては「窓を開かせる」という自動詞使役が不適格だし、逆に「生徒を立たせる」に対しては「生徒を立てる」という他動詞が不適格である。ここに誤用が起こる。

先に述べた2種の誤用原因の仮定から、このタイプの誤用については、以下の2つの予想を立てることができる。母語の反映としては、中国語が使役という構文より、他動詞という語彙を多用することから、必要な使役構文が欠落するだろうと予想される。いっぽう、学習者の日本語体系としては、個々の単語で形の異なる他動詞より、「～ニ～

（サ）セル」という一定の形式を持つ使役構文の
ほうが、習得が容易で応用が効くから、不要な使
役構文が出現するだろうと予想される。この2つ
の予想は完全に相反する。

分析の対象としたのは、僕が対照研究の対象と
している中国語を母語とする日本語学習者の作文
である。彼らの作文から、「他動詞－自動詞使役」
の文を集める。さらに、その文を母語である中国
語に戻させる。次に、誤用例についてはそれを正
しく直す。こうして、同じ意味内容について3種
類の文が集まる。1つめは正しい中国語の文、2つ
めは中国人の作った日本語の文、3つめは正しい
日本語の文である。

詳しいことは省くとして、簡単な結果の1つは、
以下の数値である。これは、上のようにして集め
た3種類の文それぞれで、自動詞使役文と他動詞
文のどちらを多く用いているかというめやすとな
る。

(3)

	中 国 語	中国人の作文	正しい日本語
自動詞使役文	16%	30%	33%
他 動 詞 文	84%	70%	67%

ところが、この数値では、中国人の日本語作文
について、2つの相反する予想が2つとも成立す
ることになる。つまり、正しい日本語と比べると
他動詞文が多いから、母語である中国語が反映し
ていると見ることもできる。しかし、中国語と比
べると自動詞使役文が多いから、応用の効く構文
的处理が優先しているとも見える。

2つのことがらがともに成立するからには、ど
ういった条件ではどちらが優先するのか、または
どの範囲でどちらが機能しているのか、といった
問題が解決されなければならない。さもなくば、
「他動詞－自動詞使役」の誤用については、「どっ
ちもあり」という無意味なことしか言えなくなる
からだ。しかし、2つの要素のそうした関係を見
出す試みは、いまのところうまくいっていない。
言えるのは、構文的处理の有利性に、母語の影響
が歯止めをかけているということくらいである。

結局のところ、実際の誤用は、先述の2つの原
因のどちらかに一方的に帰するわけではないのか
もしれない（(1)と(2)の例も、本当はもっと複雑な
原因を持っている）。そして、僕は、誤用をおか
した学習者以上に、あいかわらず誤用のプロセスと
原因の整理に頭を悩ますことになる。

つまり、やっぱり、誤用は難しい。

神奈川大学での日本語の授業とその問題点

秋山 洋子（神奈川大学非常勤講師）

神奈川大学での日本語は、現在「日本語Ⅰ」か
ら「日本語Ⅳ」まで4コマ各2単位の授業がおこ
なわれ、2人の非常勤講師が担当している。この
ほかに、留学生対象の講義「日本事情」も開講さ
れている。日本語授業の対象は、短大を含むすべ
ての学科にわたっている。その具体的内容と問題
点について、知っている範囲で述べてみよう。

大学での語学の学習を考えると、まず最初に
目的、つぎに時間と内容が問題になる。日本人大
学生の外国語学習とはちがい、留学生の場合には、
目的は明瞭である。日本人の学生といっしょに授
業を受け、ついていけるだけの日本語力を身につ

けることだ。ほんとうなら、この目的にそうだけ
の日本語力を持った学生だけに入学許可をすれば
問題はない。しかし、留学生の日本語学習は日本
語学校における1～2年間であり、いかに努力し
ようとも、日本に生まれ育った学生と同じ語学力
を数年で身につけることは不可能である。入学者
の選抜においては、大学側もどこかで妥協せざる
を得ない。そのうえ、日本の大学の偏差値のよる
輪切りには、留学希望者もまた敏感であるから、
留学生もだいたい日本語能力の高い順に偏差値の
高い大学からわりふられてゆく。神奈川大のよう
な私立中堅校に来る学生は、日本語学校卒業時の

成績を5段階評価でいえば3の上から4といったところだろう。(同時に日本にきた就学生の中で卒業まで落ちこぼれず残る者は半数程度だが)。

こういう学生を受入れて、大学の授業についていけるようにするためには、何を補わなければならないか。一般に語学の能力は、読む、書く、聞く、話すの4技能にわけられる。この4技能は互に関連しており、同時に発達することが望ましいのはもちろんである。神奈川大学の授業でも、最初のわりふりでは4コマの授業にそれぞれを割振ったのだが、その後は、講師がかなり自由に内容をきめるようになってきた。

私はとりあえず大学の授業についていくために必要な能力は、書くことと聞くことではないかと思っている。読む能力はもちろん重要だが、漢字圏の学生の読解力はかなり高く、中国の学生の漢字の知識は最近の日本人学生の比ではない。幸いなことに専門的な文献であるほど漢語の占める率の高いのが日本語の特徴であるから、大学の教科書程度は何とか読みこなしているようだ。授業では、読解は他の講師が重点的に取上げておられることもあって、このことろ私の授業ではあまりやっていない。

また、話す能力については、ほとんどの学生が日常生活に必要な会話力は2年間の日本生活で身につけており、それ以上の討論やスピーチ能力は、日本の大学の教育システムでは、幸か不幸か必須のものではない。必要だとしても専門課程のゼミの段階になってからである。そういうわけで、大学に入学した留学生にとって、まず必要なのは授業を聞いて理解する能力であり、レポートや論文を書く能力である。

☆作文教育について

先に述べたような観点から、私の担当する日本語授業では、一貫して作文を中心のひとつにおいてきた。この授業を具体的に紹介しながら、作文教育の問題点を考えてみたい。

現在作文の授業は週一回、授業には凡人社の『実践にほんごの作文』という教科書を使っている。この教科書は、大学での作文教育のために作られた数少ないもののひとつで、10章からなり、「事実を述べる」「意見を述べる」「引用する」「要約する」

といった文章の機能別に章だてされている。各章は例文、基本表現、練習問題で構成されており、このほか、巻頭に原稿用紙の使い方や、助詞「は」と「が」、自動詞と他動詞など、外国人にとって難しいポイントのまとめと問題がついている。

授業に教科書を使うか、教師が自主教材を作るかは難しい問題で、既成の教科書を使う場合どうしても欠点が気になってくるものだが、自主教材の場合は教師の努力と能力が要求されるのは当然としても、毎回コピーで与えたものはきちんとした形で保存されにくく、学生の頭から消えると同時に教材そのものも散逸してしまう可能性が高い。その点、1冊にまとまっていれば、のちのち論文を書くときなどにも基本表現を参照することができる。現在使っている教科書にも不満はあるが、とりあえず基本的な流れではこれに依拠することになっている。大学レベルでの日本語教育は、現在必要に迫られて実践・理論ともにどんどん進んでいるので、作文教育の教科書も種類がふえてくることを期待している。

授業では、必ず毎回書く作業をさせる。教科書の課題にそって、特定の表現を使った短文、数行で答えられる設問への回答もあるが、400字程度のまとまった文章を書くことが多い。文章は必ず添削し、次回に返却する。本当はこれをもう一度清書させたいのだが、いまのところ清書するように勧めはするが強制はしていない。短い課題の場合には、前に出てきて板書させ、みんなで批評することもあるが、授業に変化が出るためか、案外よろこんでやっている。また、提出された作文の中から誤用例を集めてプリントし、みんなで正解を考えるのも学生にとっておもしろいようだ。

学生の作文の問題点はどこにあるだろうか。単純な問題からあげて行くと、まず文体の混乱がある。一般に日本語の初歩では「ていねい体(ます)」の話し言葉を教え、それにそって「私の一日」とか、「私の家族」といった作文を書かせるところから作文指導がはじまる。いわば日本の小学校の段階である。したがって、最初の授業で自己紹介の作文を書かせると、ほとんどの学生がていねい体を使っている。これを「普通体(だ、である)」を使って大学生らしい文章を書くようにさせるのが最初の

指導になる。文体の問題はかなり機械的に処理できるので、たいていの学生はすぐ習得するが、中にはいつまでも混乱して、形容詞の終止形に「だ」をつけたりするものもある。

問題がいちばん多く、いつまでたっても難しいのは助詞である。とりわけ、中国の学生にとっては、母国語にない助詞という概念自体を会得するまでにかなりの努力が必要だったことだろう。主格の「は」と「が」、場所をあらわす「で」「に」「を」の使い分けなど、ある程度まとめて説明し、それぞれの作文ではそのたびごとに訂正しているが、なかなか完璧にはならない。その点韓国の学生は、母語に助詞があるので、それほど苦労はしないようだ。

その他、接続詞、動詞のアスペクト（「た」と「ている」など）、「あれ」「それ」「これ」（中国語では遠称と近称しかない）の使い分けなどがよくひっかかる点だ。

語彙についてはあまり問題がないが、ときおり母語にあって日本語にない語彙が混入したり、中国語の略字が使われていたりする。もうひとつ意外な落とし穴は、作文の中で立派に使いこなしている語彙を読ませてみると読めないことだ。読めないということは、耳で聞いてもわからないということである。これは大きな問題なのだが、実際には毎回各自に朗読させる時間の余裕はとてもない。学期末などに、作文をもとにスピーチをすることなども試みたいと思っている。

細かいことをあげればきりがなが、じつは一番問題なのは、文脈の通らない文章である。日本語中級までに習得する日本語の文型は、非常に単純なものである。しかし、自由に作文するととなると、言いたい内容は大学生のレベルだから、そのあいだのギャップが埋められない。文章が長くなるにつれて、最初に出てきた主語と結びの述語がずれてしまう。あるいは、自動詞と他動詞が逆になる。要するに、日本語の文章として成立しないのだ。

この種の混乱は、日本人でも話言葉の場合などはよくおこる。わかっているつもりで間違えるのはだれにもあることだが、問題なのは日本語の基本構造を把握しきれていない場合だ。授業をしてみると、毎年何人かはこういう基本的な問題を持った

学生が出てくる。こういう学生のなかには、日本語学校がつぶれて途中までしか授業が受けられなかったという者もいるが、難しい語彙や慣用表現などはたくさん知っていて、日本語能力にけっこう自信を持っている者もいる。逆に、語彙が少なく小学生のような文を書いている、文脈はきちんと通っている者もいる。後者の場合はこれからどんどん語彙や表現を増やしていくことができるが、前者の場合は難しい。これは、現在大学入学には必須となっている日本語能力検定の偏りと関係がある。きちんとした日本語の構文を身に付けるべき日本語学校の第二年次が、選択式の模擬試験に費やされていることと無関係ではない。現在、学生のこのような問題には個別の添削で対応することしかできていないのだが、実際には根本的な問題がある学生は指摘された問題点を十分把握しきれない。逆に、基本的な問題のない学生は、指摘された細かい問題点に敏感に反応する。したがって、一年間の指導でそれぞれに最初の段階よりは向上したとしても、学生間にあったギャップを埋めるところまではいかないのが現状である。

☆語彙をふやす

さきに、学生に要求されるのは書く能力と聞く能力だと述べた。しかし、現在担当している授業では、いわゆる聴解はやっていない。例えばテープ機材を使って聴解そのものの授業をするのも一つの方法ではあるが、学生にとっては実際のすべての授業が聴解の現場となっているわけだから、むしろそれを助けるためには基本表現や語彙を増やすことが必要なのではないかと考えて、このところそういう授業をしている。昨年と一昨年は、『日本語新聞の読み方』というテキストを使って語彙を補いながら、実際の新聞を読んでみた。このテキストには、名詞と動詞を組合わせた基本表現の一覧があるので、これを毎回1ページずつ与えて次回に漢字、読み、助詞の穴埋めなどを組合わせた小テストをおこなった。これは単語を音として覚えることと、間違いやすい助詞を動詞と組合わせて覚えてしまうという意味では効果があったとおもう。

今年度は、他の授業で新聞が取上げられているので、趣向を変えて『日本語表現便利帳』（専門教

育出版社)をテキストにしてみた。これは、衣、食、住、人の性格や外見、気候、組織など10項目にわたってさまざまな表現が集められ、問題が添えられたユニークなテキストである。内容はなかなか面白いのだが、集められた表現があまりに多く、最初のうちでいねいにやっていたのでちっとも進まない。途中で方針を変えて、練習問題を重点的にやることにしたが、このテキストはむしろ作文の副教材としたほうがよかったかもしれない。授業の最初には、『外国人のための助詞』(武蔵野書院)から、練習問題を1ページずつやっている。このような短時間の練習のくり返しは、気分転換にもなり、積重ねることでそれなりの効果もあるようだ。

☆授業時間とカリキュラム

現在神奈川大では、日本語の授業は4コマである。(中国語学科の学生にはあと一コマ必修となっているが、現在のところ開講されていない)。じつは日本語が開講された最初の2年間は、これが倍の8コマあった。なんとか留学生の日本語能力をあげようという配慮だったが、単位数が2コマで2単位と他の語学の半分だったこともあり、学生の負担が大きすぎるので現在の4コマになった。授業をする立場としては、作文については時間がたっぷりあるのはありがたかったが、もうひとつの授業は2コマ続けて飽きさせないように授業を進めるのはなかなか難しかった。2年目は授業の後半を自由課題とし、学生に自分で学習計画を立てさせて、速読や問題集をやらせてみたが、結局ほとんどが同じ問題集をやるような結果になった。2年ずつの経験からみて、2倍の授業時間だからといって2倍の効果があったとはいえないようだ。

その理由の一つは、語学の学習には段階があるということだ。短期集中が大きな効果を発揮するのは初級から中級にかけて、留学生の場合でいえば日本語学校の2年間である。この期間に、基本的な語彙と文法構造を身に付けてしまうと、あとは無限にある語彙や表現を徐々に拡大していく段階になる。大学にはいった留学生は、この段階にさしかかり、大学生活のすべてがかれらの日本語習得の現場となるわけだから、日本語教育はこの段階ではむしろ脇役にまわり、かれらの日本語習

得を効果的にサポートする役割をはたすべきだろう。そのためには、日本語の授業時間が多すぎて学生に負担になるようでは逆効果である。

短期集中の時期がすぎたということは、逆にいえば、気の長いフォローが必要だということだ。その点では、日本語の単位を1年生で全部とってしまうのは、必ずしもいいとはいえない。現在はできれば1年生で全部とり、残した者が2年というふうになっているが、他の授業で出てきた日本語の問題を持って来る場として、2年目にも日本語の授業があったほうがいいのではないだろうか。教師のほうも、2年間にわたって同じ学生とつきあうと、その学生の問題点もよく見えて、適切な指導もしやすくなる。

なお、中国語学科の2単位については、例えば中国語和訳のような授業を設定して、中国語学科の日本人学生や中国語学科以外の中国人学生も自由選択できるようにしたらおもしろいのではないかとおもうが、どうだろうか。

時間よりもっとたいせつなのはカリキュラムである。じつは神奈川大学の日本語授業で最大の問題は、日本語授業全体の方向をきちんと決めるシステムができていないことである。現在日本語の授業は、非常勤講師2人が2コマずつ教えているが、授業内容はそれぞれが完全に任されている。というと信頼されているようだが、要するに全体責任を負うところが存在しないのだ。講師同士も出講日が違うので、顔をあわせることがない。日本語用の資料を置く場などもないので、非常勤講師控え室の書棚の一部を利用している状態である。外国語学部には日本語教師養成の副専攻課程があり、そこには専任の先生もおられるようだが、これも留学生の日本語教育とはまったく関係がない。

今後、留学生の受入れを続け、ふやしていくのであれば、日本語教育も先を見通したシステムが必要になってくる。この4年間の試行錯誤を今後の礎石として役立てるためにも、経験をきちんと把握して集約するところがなくてはならない。日本語の授業、日本事情の授業、留学生のカウンセリングなど、全体を見渡して適切な指示のできる責任体制が必要になってくるだろう。

南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム

——言語理論と日本語教育、そして日本語教師養成をめぐる——

武内 道子

南山大学は外国人留学生別科において、外国人留学生に対する日本語教育を行ってきているが、今年（わが言語センターと同様）設立20周年を迎えた。さらに、平成4年に日本語教育専門家養成をめざして、外国語学研究科に日本語教育専攻の修士課程を開設し、初めての修了生を輩出したという。別科と日本語教育専攻が共同で、20周年と修士過程の軌道に乗ったことを記念して、この国際シンポジウムが平成6年6月18日と19日の両日開催された。

内外ともに著名な言語学者と教育者を日米から迎え、参加者は当初250名を予定していたが、あまりの申込者の多いのに倍近い人数を受け付けたようである。それでもかなりの人を断わらざるを得なかった由である。

第一日（18日）の午前のセッションは三つの基調講演があった。井上和子氏による「日本語教育における言語学の役割」は、過去の日英対照研究によって明かすみにされた二言語間の普遍的特性と個々のあらわれの差異が、効果的に、効率的に日本語教育に寄与してきたことを述べ、今後の研究は個々の文法事象間の比較対照だけでなく、言語全体の組織的差異、有機的つながりを見ていくことの必要を強調された。

「アメリカで日本語を教えるために」と題された三浦昭氏（現ウイスコンシン大学教授）の話は、氏の40年余に及ぶアメリカでの教師業の実際であった。終戦直後のarmy methodから始まって、戸惑い、驚き、挫折、喜びを具体的な出来事を交えて話され、笑いと感銘を誘った。宮地宏氏（ミドルベリー大学教授）は“Language, Culture and Personal Identity”と題し、言語教育に携わる者はいかにあるべきかという哲学的考察を自身の経験から話された。

第一日の午後から分科会になり、日本語教育研究発表が6本、日本語学関係の研究発表が10本あつ

た。さらに、日本語教育関係のパネルディスカッションが3回もたれた。それぞれのタイトルは「留学生の交流と日本語教育」、「言語教育の諸理論の評価と日本語教育への展望」および「教師養成における諸問題」で、いずれも教育にまつわる大きな問題を、4人のパネリストと司会によって白熱した議論が飛びかった。研究発表者もパネリストも、アメリカ人、イギリス人、中国人が加わっていたが、すべて日本語で行われたのが印象に残った。

私は日本語学分科会にのみ顔を出した。アメリカから第一線の日本人、アメリカ人の文法学者、理論言語学者が顔を揃え（久野暲、黒田成幸、宮川繁、斎藤衛、Naomi McGloin, C. Fillmore）、国内の若手学者も加わった発表は、一つ一つが密度の濃いもので、頭も身も消耗した。

日本語教育者はph.Dを持ち、言語学者は教えることを経験しており、こういう背景が一方通行、独断的にさせない雰囲気を作っているように見えた。理論と実践の場の行き来の必要性はどの分野でも必須であろう。言語の理論的研究と日本語教育（裏返しとしての英語教育）の相互活性化にこのシンポジウムは貢献すること大であると確信した。個人のレベルでも、国内的にもそして国際的にも意義あるものであった。

国際キリスト教大学の語学科が戦後育成してきた日本語教師がアメリカ各地に散らばって、地についた立派な仕事をしてきたことが改めて認識された機会でもあった。さながらICUの同窓会の感があり、私事のレベルでも、懐かしい人々とのたくさんの出会いがあり、旧友を暖める機会になり、有益であった。懇親会、昼食時、ティータイムも議論とreunionに花が咲き、盛会そのものであった。

コンピュータの使い方

鈴木 広子

語学教育の実践および関連研究において、様々な目的でコンピュータが利用されるようになってきた。情報を正確にかつ大量に保存・再生し、迅速に分析することができるという点で、その利用価値は高い。しかし、利用者である人間が、関連機器を含めた環境を設定するのに多くの時間と労力を費やし、コンピュータの利用範囲の限界に左右されると、本来の目的を見失いがちになる。10月8～10日、岐阜大学で開催された教育学関連学会連合第4回全国大会で発表した研究と、同大会で同じような課題に取り組んでいる他の研究から、このような問題点について考えてみたいと思う。

「外国語教育の視線運動分析による映像教材におけるキャプションの効果」(保崎、鈴木、井上、1994)は、英語教育で利用され始めた英語字幕付き映画の効果的な提示方法を探ることにあった。映像・文字情報が、音声情報の処理過程にどのような影響を及ぼすのであろうか。映画視聴中の学習者の視線運動を分析することが、その点を解明する1つの手がかりとなると考えた。映画を複数回見る合間に、字幕を読むことに慣れる練習問題を施し、練習の前後の視線の動きを比較した。結果は、3つの情報モード(音声、映像、文字)は、学習者の英語の聴解力と読解力(読みの早さ)によって、干渉にも相乗効果にもなることを示唆した。

図1：視線運動の変化(練習効果あり)

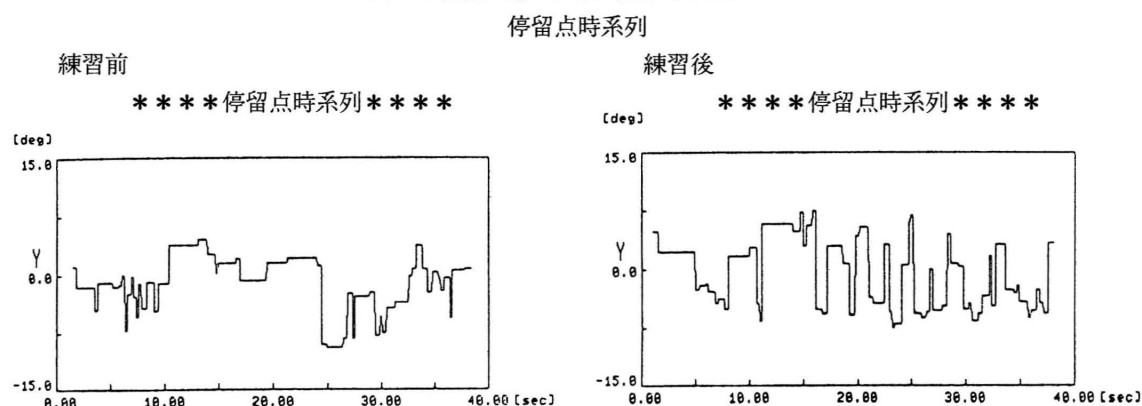


図1の結果を導くまでに、次のような実験準備が必要であった。まず、映像に字幕を書き込み、編集する。画像の質が落ちるほどの重ね編集が必要であった。映像情報をデジタル化して、パソコン上で編集する充分な環境はなかった。次に、学習者に付着してもらったアイマクレコーダの使い方およびレンズの調整に慣れ、視線の軌跡をコンピュータに保存、分析させるシステムを整備する。同時に、実験手順の整理、練習問題の作成を行った。データ収集までのこの段階で、かなりの時間

が費やされ、コンピュータが精密で迅速であるがゆえに、理想的な環境でデータを獲得することの難しさが実感された。視線の動きが、図1のように定量化されたことは、科学的な分析という点では大きな一歩であったが、練習後に、視線が下の方(字幕の方に)に頻繁に動いているということが、理解過程において何を意味するかについては実証されていない。

人間の手作業では計れない細かいデータは、人間が解釈しきれないデータであることもある。実

験後、被験者に「字幕あるいは映像にどのくらい頼ったか」を尋ねた方が、案外、正確な分析ができるのかもしれない。パソコンで分析されたデータの客観性について再考する必要があるというのが、今回の実験の反省点である。

次の発表「教育の方法および技術における英語映画を用いた教材研究」(益谷、1994)は、学生に、英語映画を素材に、パソコンを使って学習のコースウェアを設計させ、マイクロティーチングを行わせた授業の実践報告であった。映画の一部を取り出し、英語字幕を利用して、その内容理解とセリフの聞き取りの練習問題をパソコン上で作成するという課題である。映像をパソコンに取り込む、コースウェア作成に使用するアプリケーションソフトに慣れるといった作業に多くの時間が費やされた。一応の体裁は整っているのに、学生の達成感は満たされるが、練習問題の内容が稚拙であるという批判が会場から上がった。

「英語ヒアリング学習用CAIにおける映像情報の揭示効果に関する研究」(高橋、1994)は、CAIシステムを開発する際の効果的な映像情報の提示法に関する基礎的研究である。映像情報と聞き取りの難易度との関係を考察している。対話、報道、講義、インタビューの4つの素材を使って、映像

情報量に変化をつけた。自由筆記型テストの結果、映像情報が多いほど内容理解度が高いという相関が出た。科学的かつ精緻な手順を踏んでいる実験であるという印象を受けた。映像情報量は、NTCS信号をRBG信号にAD変換してパソコンに取り込み、フレームごとの変化量を求めるという方法をとっていた。しかし、この方法はどのような画像であるかの情報の質、とくに内容との関連性が考慮されていない、性質の違う内容の難易度がコントロールされていないなどの指摘がされた。この研究の中心課題は、映像情報を科学的に数量化することであったことは、発表内容のこの課題に対する比重から察することができるが、やはり、パソコン処理の限界が、このような指摘につながったと思われる。

今後、コンピュータと関連機器は、より高度な技術を持ち、データの定量化が進み、より科学的な実験が可能になっていくと思われる。しかし、人間の解釈、意味づけとは「相対」的である。コンピュータのデータが意味するものは何か、どのように応用すべきか、今後の研究課題に加えなければならない一項目である。

国際情報通信網 INTERNET の利用と情報収集

外国語学部 保崎 則雄

世界中のどこでどのような新しい研究(成果)が発表されているのか、他国の状況はどうなのか、自分の行っている研究課題は其中でどのような位置づけがなされるのかといったことに、私は研究者の一人として常に興味、関心がある。たとえば国内の動向は学会、研究会に出席すれば、それなりに情報が得られる。ところが、海外の情報については、そう頻繁に学会に出席も出来ず、また出席できたとしても多くの発表を聞く時間もないのが現実であり、プロシーディングも常に手にはいるとは限らない。このようにややもすると情報

の収集、発信に手間取り、折角新しい研究課題に着手してもなかなか貢献できないという事態が生じ易い。国際共同研究も手紙のやりとりでは参加しづらい。これはまさにシャーロックホームズの世界の通信手段を現代人がどのように受けとめるかに似ている。

コンピュータを利用した情報通信ネットワーク、INTERNETはこの点、利用の仕方によっては非常に便利であり、利用者数は世界で2000万人とも3000万人とも言われる。実は私も昨年4月よりこ

のネットワークに参加し、電子メール（E-mail）を中心に情報収集、交換を行い、授業でも部分的に活用している。敷設、加入の手続きについては情報処理センターに譲るとして以下、利用者として気がついた点を述べる。

まず研究室から簡単にアクセスできるのがよい。端末としてのコンピュータはたとえすぐ隣の部屋にあったとしても、日常的な利用からはかなり疎遠になる。利用時における空間的距離は心理的距離に級数的に比例すると思ってまちがいない。手の届くところにあるメディアを通じて地球の反対側に手紙を送ることが出来るという利点は、何物にも替え難い。

今のところ利用料金が個人負担にならず、既に敷設してある設備を主に使用するという事で大学負担になっているのが現実である。今後の利用頻度の拡大でこれについては変化を見るかも知れないが、いずれにしても神大規模の高等教育研究機関においては、情報収集、発信手段は安価に利用出来なければ意味がない。

送信後、返事がくるまでにせいぜい時差分ぐらいしか時間がかからないのも長所である。実際には、送った時点でホストコンピュータに入力されるので、返事待ちの時間は、読み手側がどの程度頻繁にメールボックスを覗くかということにつきる。つまり頻繁に研究棟などにあるメールボックスをチェックする人には便利なシステムである。誰かが情報を送ったことはコンピュータのスイッチを入れない限り分からず、この点が郵便と違う。自分で情報を取りにいくということは必要である。

情報を集めるという姿勢が変わるということも特徴であろう。従弟制度的な師匠弟子というような縦のつながりは多少なりとも変化する。つまり横並びになり、逆転する可能性もある。

それなりの倫理感が要求される。モラルについては新しいメディアが開発される度に叫ばれるが、このINTERNETにおいてもいわゆる情報の垂れ流し、盗用、違法管理などの点で良識は要求される。多くの場合現在の法制度には現実的取締は期待できないので、自己管理規制能力が基盤となる。

最後に、通信はほとんど英語でやりとりがなされるというのが現実である。日本語でもできるが、この分野、この目的では日本語は不自由である。但し、INTERNETを利用した外国語教育ということは、以前より私が提唱している電話利用の語学教育を発展させたものとして現実的には考えられる。今後語学教育のみならず、大学経営面でのプロジェクトとして真剣に取り組む価値、必要性があろう。

以上の特徴は若葉マークの一利用者が一年ほど利用してみた結果である。興味のある方は楽しくもあるので、是非利用してみるとよいであろう。余談ではあるが、日常私は、私信については縦書きの自筆で出す。自分なりに使い分けるようにしている。